

2024 年日本臨床スポーツ医学会 (JSCSM) —韓国スポーツ医学会 (KSSM) Travelling Fellow 報告記

倉坪亮太*^{1,2}, 藤本秀太郎*^{3,4}, 水野雄伸*^{5,6}, 中瀬順介*⁶

キー・ワード：Traveling Fellow, 国際交流, スポーツ医学

●はじめに

「Traveling Fellow とはなんだろう？」

これは、日本臨床スポーツ医学会の学会誌で「Traveling Fellow 募集」のページを偶然目にした時の感想です。医師ではない私にとって、この言葉はあまり馴染みがありませんでしたが、調べてみると「スポーツ医学に関連する施設を見学し、国際学会で発表し、現地交流を行うプログラム」ということがわかりました。「国際学会への参加も施設見学も面白そうだし、美味しい食事もしめそう」と軽い気持ちで Traveling Fellow の募集エントリーに挑戦することを決めました。しかし、実際にプログラムに参加してみると、その内容は想像をはるかに超えるものでした。このような安易な動機でエントリーした自分を振り返ると恐縮するほど、非常に充実した日々を過ごさせていただきました。

今回、日本臨床スポーツ医学会 (Japan Society

of Clinical Sports Medicine；以下、JSCSM)—韓国スポーツ医学会 (Korean Society of Sports Medicine；以下、KSSM) の Traveling Fellow として、韓国のスポーツ医学関連施設へ訪問し、KSSM 学会で発表する機会を得ました。ここに、その貴重な経験についてご報告いたします。

●メンバーと日程

Traveling Fellow のメンバー選考は、2024 年 3 月末に書類審査が行われ、4 月末にオンラインでの面談（英語のみを使用して実施。内容は自身の研究に関するプレゼンテーションとその質疑応答）が実施されました。その結果、メンバーとして藤本先生（整形外科医、脊椎専門）、水野先生（理学療法士；以下、PT）および私（PT、日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー；以下、AT）が選拔されました。また、Traveling Fellow の現地統括として中瀬先生（整形外科医、膝関節専門）が同行し、計 4 名で 2024 年の Traveling Fellow チームが構成されました。

日程は、2024 年 10 月 16 日（水）を移動日（出国）とし、17 日（木）および 18 日（金）に施設見学を行い、20 日（日）には学会発表と移動日（帰国）が予定されました。

*1 北里大学北里研究所病院リハビリテーション技術科

*2 順天堂大学大学院医学研究科スポーツ医学教室

*3 札幌医科大学整形外科講座

*4 函館五稜郭病院整形外科

*5 金沢大学附属病院リハビリテーション部

*6 金沢大学大学院整形外科

Corresponding author：倉坪亮太 (r.kura@kitasato-u.ac.jp)

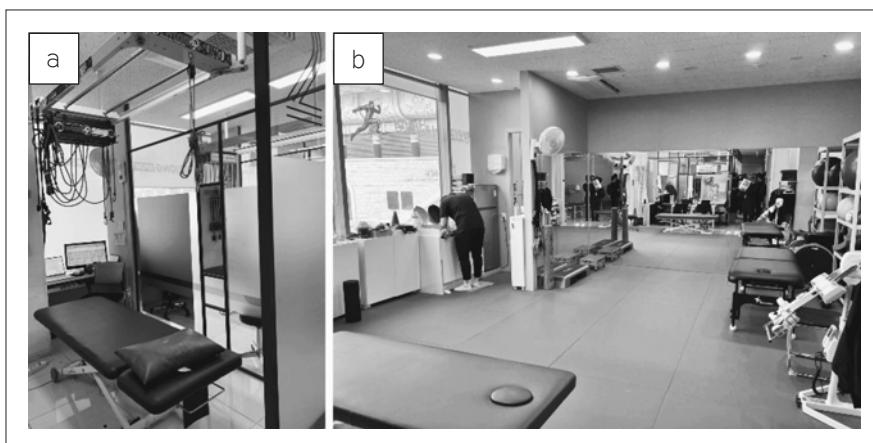


図1 理学療法センター
a：ベッド，b：運動療法スペース

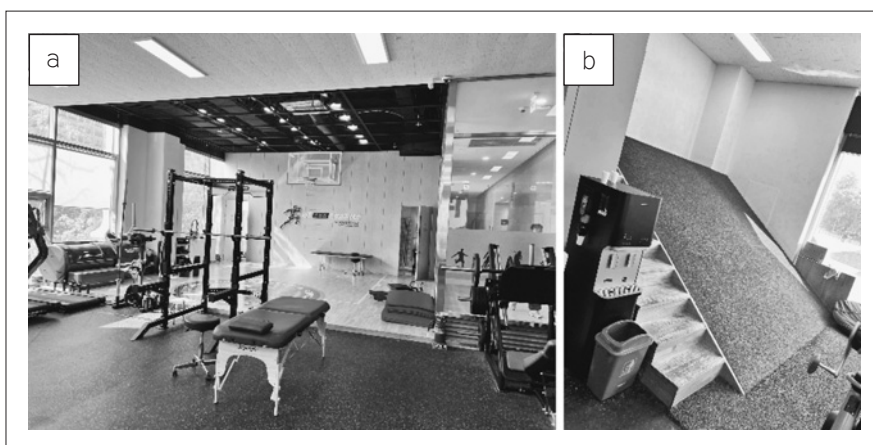


図2 スポーツパフォーマンス
a：運動療法エリア，b：傾斜路

●施設見学

初日はプライベートクリニック「Sejong Sports Medicine & Performance Center」を訪問しました。この施設はスポーツ選手を対象とした診療が中心の29床を有するクリニックで、リハビリテーション関連では理学療法センター(図1)とスポーツパフォーマンスセンター(図2)が設立されていました。理学療法センターのスタッフはPT免許を、スポーツパフォーマンスセンターのスタッフはPT免許とAT資格を保持しており(PTは国家資格、ATは認定資格という点は日本と同様です)、診療内容は理学療法センターがランニングの再獲得まで、スポーツパフォーマンスセンターは競技復帰まで、と大まかに分けられていました。しかし、スタッフは完全に分業されているわけではなく、理学療法センターからスポーツパフォー

マンスセンターまで患者を通して担当することもあるとのことでした。

理学療法センターの療法士は1時間に2名の患者の対応をする一方、スポーツパフォーマンスセンターでは3時間を1セッションとし、PT1~2名で患者7~10名の対応をする形式で、日本の医療保険制度下での診療システムとは異なっていました。どちらのスタッフも非常に勉強熱心な姿勢が感じられ、提供している運動療法の種類の豊富さや物理療法の設定の細かさなど、細部にわたる配慮が施されている点に刺激を受けました。

ただし、診療の根本的な内容には、日本と大差は感じませんでした。例えば、膝前十字靭帯再建術後や鏡視下バンカート修復術後のリハビリプロトコルはほとんど同様でした。また、理学療法センターでの診療内容も、日本の急性期病院と非常に類似しており、徒手療法、物理療法および運動



図3 Samsung Human Centerの様子
a: バスケットボール専用コート
b: テコンドー専用コート 壁には歴代選手の写真
c: トレーニングルーム
d: プール

療法を行っていました。ただし、日本と比較して物理療法(特にクライオセラピーと体外衝撃波)の使用頻度が高い点が目立ちました。

ハイパフォーマンスセンターは、人工芝のフィールドが広がり、バスケットゴールも設置され、傾斜角度 20 度程の傾斜路があるなど、競技特異的な運動療法および運動指導の実践に適した環境が整備されていました。このような施設を持つ医療機関は日本には少ないと感じられ、競技復帰支援において円滑な対応が可能であることが印象的でした。

2 日目の午前中は「Samsung Human Center」を訪問しました。Samsung 社が所有するスポーツチーム(バスケットボール、バレーボール、卓球、バドミントン、レスリング、テコンドー)のために設立された施設で、各種目専用のコートやトレーニング室、リハビリテーション室、さらにメディカルチェック機能が集約されていました。また、選手の居住スペースや食事など、衣食住に関わる機能も完備された広大な施設でした(図3)。トレーニング室やリハビリテーション室では、選手の強化トレーニングだけでなく、競技復帰プログラムやスポーツ障害の予防プログラムが実施さ

れており、メディカルチェックでは Samsung 所属選手のデータが蓄積されていました。施設の方によると、20 年ほど前までは種目ごと点在していた施設を徐々に集約し、現在の形に至ったとのことでした。選手に快適な環境を提供するだけでなく、蓄積された貴重なデータがスポーツ医学研究にも役立つと感じました。

午後は「Samsung Medical Center」を訪問しました(図4)。こちらにも Samsung 社の名前が入っていますが、Sungkyunkwan University の附属病院であり、一般の方が利用可能な大学病院でした。病床数は約 2500 床(整形外科は約 100 床、手術室は約 100 室)と巨大な病院であり、韓国の 5 大病院の一つだそうです(最も病床数が多いのは Asan Medical Center で 2715 床)。日本で最も大きな病院は藤田医科大学病院の 1376 床(2024 年 12 月時点)ですので、日本では見ることもない規模の大きさに驚きました。

この病院では、鏡視下腱板修復術と腰椎固定術を見学しました。同行した整形外科医の先生からは、「どちらの手技も基本的な内容は日本と変わらないが、術前後の準備や術中の流れが非常にスムーズで、結果として日本と比較して手術が早く



図4 JSCSM-KSSM Traveling Fellow プログラム修了式

終わる印象を受けた」とのコメントがありました。素早い手術を実現するためには、術者が手術の流れを一定に保ち、その流れを全スタッフで共有することが重要であることを、改めて実感しました。

Human Center および Medical Center は、企業を母体とする施設としては日本では類を見ない規模を誇り、その大きさや設備の充実ぶりには驚くばかりでした。一方で、韓国では紹介状なしで大病院への受診が可能のため、患者が集中し、結果として大混雑が問題になっているとのことでした。

●学会発表

最終日は 65th Annual Congress of The Korean Society of Sports Medicine に参加しました。この学会は、10月19日と20日に行われていましたが、学会での主言語が韓国語だったため、私たちは発表機会をいただいた2日目の「KSSM-JSCSM Fellowship program」のみに参加いたしました。

メンバーの発表に先立ち、JSCSM の理事長の山澤 文裕先生より「マラソンレースにおける心肺蘇生」に関するご発表がありました。このご発表では、日本の代表的な大会である東京マラソンにおける安全対策が紹介され、韓国の先生方もその内容には大変驚かれておりました。私自身も日本陸上競技連盟トレーナー部の一員として東京マラソンの救護活動に複数回参加した経験があり、救護活動の重要性を再認識する貴重な機会となりました。

メンバーの発表では、藤本先生が「プロ野球選手における局所麻酔併用内視鏡下脊椎手術後のスポーツ復帰アウトカム」について、水野先生が「膝前十字靱帯再建術後の再損傷予防を目指した移植腱におけるコラーゲンタイプ組成の身体成熟度別の検討」について、そして私からは「成長期男子野球選手における腕尺関節裂隙距離 Gap の開大に影響を与える因子」について発表しました。また、中瀬先生からは「スポーツ活動に関連した膝前方部痛の超音波診断と治療」に関するレクチャーが行われました。いずれの発表にも、フロアから多くの質問やコメントをいただきました。発表と質疑応答は英語で行われたため、日本語発表とは異なる緊張感や難しさを感じましたが、国内では得られない非常に貴重な経験となりました。

●Traveling Fellow から得たもの

Traveling Fellow 終了後1ヵ月時点で、メンバー全員に対して事後アンケートを実施しました。アンケートの内容は、質問1「Traveling Fellow を経て、最近1ヵ月間の臨床、教育、研究、国際交流に変化はあったか」、質問2「この Traveling Fellow を第三者に薦めたいか?」の2問としました。質問1については、「非常に役立った」、「役立った」、「どちらとも言えない」、「あまり役立たない」、「全く役立たない」の5段階評価と、そのエピソードを自由記載で回答してもらいました。質問2については、「全く推奨しない」を1点、「必ず推奨す



図5 世界平和の門の前で JSCSM チームの集合写真
(左から中瀬先生, 山澤先生, 松本先生, 筆者, 藤本先生, 水野先生)

表1 事後アンケートの得点 (回答者4名)

	非常に 役立った	役立った	どちらとも いえない	あまり 役立たない	全く 役立たない
臨床およびスポーツ現場	0	2	2	0	0
教育	1	2	1	0	0
研究	0	2	2	0	0
国際交流	1	2	1	0	0

る」を10点とする10段階評価で回答してもらいました(ネット・プロモーター・スコア)。

アンケートの結果を表1および表2に示します。教育と国際交流において、参加者は変化を強く感じており、特に国際交流では帰国後も継続して連絡をとっている様子がうかがえました。また研究面では、共同研究の計画や施設見学の提案など行われ、十分な成果が得られていました。質問2については、メンバー全員が「10点(必ず推奨する)」と回答しており、このプログラムへの満足度の高さがうかがえました。

●Traveling Fellow の恩恵とメンバーとしての責任

韓国の診療現場をじっくりと見学し、現地で直面している問題点や日本との相違点について議論できたことは、Traveling Fellow に参加した大きな恩恵の一つだと感じています。どの国や施設に

も良い点・改善すべき点があるのは当然ですが、韓国では「モノ」と「ヒト」を集約し、「効率化」を図っている点が日本と大きく異なり、特に印象的でした。

さらに、国際交流は診療や研究において互いに良い刺激を与え合うだけでなく、視野を広げ、人間力を高める貴重な機会だと感じました。発表前の緊張している際には温かい声をかけて下さり、食事の時間にはフランクに話しかけて下さり、心温まる時間を過ごすことができました。今回、得た経験と人脈を今後も発展させ、JSCSM だけでなく、KSSM にも恩返しをしていきたいと思います。

国内では、PT や AT などのコメディカルが参加できる Traveling Fellow プログラムは非常に限られており、JSCSM が提供するこのプログラムは貴重な機会です。このプログラムが継続できるように微力ながら尽力できればと考えておりま

表 2 事後アンケートの自由記載欄の抜粋

項目	フリーコメント
臨床およびスポーツ現場	・ 韓国のリハビリプロトコルを知ること、自施設の実施内容が日本独自のものではないことを認識できた ・ 日本では見たことがない物理療法機器を見せてもらい、新たな機種を知ることができた
研究	・ 研究計画を立案できた ・ 韓国の先生と共同研究を進めることになった ・ 研究への意欲が向上した
教育	・ 韓国では、スポーツ整形外科が人気の診療科であり、開業も可能なため高い努力が求められるという情報を得ました。この点を日本の医学生に説明することで、整形外科の魅力をより具体的に伝えることができるようになりました ・ 韓国のスポーツ整形外科診療を見学できたことで、日本の良さと改善すべき点が見えてきた。この経験を通じて、国際交流の重要性を医学生に伝えている
国際交流	・ 専門分野の近い韓国の先生と国際学会で再会する約束をした ・ 韓国の先生から病院見学の依頼があった ・ ソーシャルメディアを通じて韓国の先生方とつながり、情報交換を継続している ・ 韓国の情報（社会情勢を含む）を気かけられるようになった

す。そして、スポーツ医学の発展に貢献できるよう精進して参ります。

● 告 知

2025 年には、韓国の Traveling Fellow メンバーが来日し、第 36 回 JSCSM 学術集会(幕張メッセ)に参加する予定です。その際、Traveling Fellow プログラム関連セッションも企画されているとのことです。ご興味のある方は、ぜひご参加いただき、プログラムの雰囲気の間近で体感してみてください。

● まとめ

施設見学および学会発表のどちらにおいても、予想をはるかに超える充実した経験をすることができました。この経験は帰国後の臨床、教育、研究、および国際交流において、大いに活かされて

います。

謝 辞

このような非常に有意義な Traveling Fellow プログラムに参加する機会をいただいたのは、JSCSM の国際委員会をはじめ、諸先輩方の多大なるご尽力の賜物です。関係各位に心より感謝申し上げます。

また、プログラム期間中、KSSM の皆さまからは非常に高いホスピタリティをもってサポートいただき、常に Traveling Fellow メンバーを応援してくださいました。さらに、訪問した各施設の方々には、あたたかい歓迎とご指導をいただきました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

最後になりましたが、Traveling Fellow プログラムへの参加を快く許可してくださった職場と研究室の皆さま、そして家族に深謝いたします。